

校長室だより

第4号

発行日 2006年12月 1日

発行者 齋藤 滋

11月21日に、第1回目のグループ討論会が行われ、6名の保護者の参加がありました。話題は「いじめ」「携帯電話」などについてでしたが、この学校の実情をよくご理解いただいたうえでの意見をたくさん拝聴でき大変勉強になりました。

さて、子どもたちの日々の学校生活の様子を見聞きしていると、うれしく思うこともあればそうでないこともあります。子どもたちの生き生きとした学校生活、活発に行われている委員会活動や係活動などの様子を見ると本当にうれしくなります。しかし、ときどきではありますが、先生方から授業に集中できない子がいるという報告を受けることがあります。そのような子どもを見ていると、その取り組みが残念なことに悪循環に陥っているのではないかと思うことがあります。その悪循環とは「集中できない(先生の話聞けない) 分からない おしゃべり・手遊び(授業の妨げ) 理解不足 自信と興味を失う」というようなものではないかと思えます。すべての場合がこのような単純な構図になっているとは言いきれませんが、私は何とかこの中の「先生の話聞く」という最初のところを改善できないかと子どもたちに働きかけていきたいと考えています。最近、授業中の頑張りが今一歩という子と話をする機会がありました。その子どもが「先生の話聞くように頑張ったらだんだんと授業が分かるようになってきて、授業中にふざけたり、おしゃべりをしたりすることが少なくなってきた」と言っていました。「話を聞く」という少しの頑張りが実は子どもの学習への取り組みを大きく変えていくことを実感しました。私はそのことに気づいた子どもの小さな努力の積み重ねをこれからも応援していきたいと思っています。

「したいことがたくさんあるはず」

子どもたちに渡すことにしている誕生日カードに「自分がしたいと思うこと、できるようになりたいと思うことにどんどん挑戦していきましょう」と書くことがあります。子どもたちが生き生きと学校生活を送るためには、夢をかなえたい、夢をかなえるために頑張ろうという気持ちが大切であると思うからです。もちろん、学校では一人ではできることはそれほど多くなく、友だちと協力しながら取り組まなければならないことが多いので、何でも簡単にできるとは限りません。

さて、自分がしたいことになかなか取り組めない子はどのようなのでしょうか。もしかしたらそういう子は「しなければならないこと」には一生懸命に取り組んでいるのかもしれませんが。教師や保護者から見れば、やるべきことをしっかりやっているのに、少し物足りなさを感じることはあっても、むしろほめられることの方が多い子どもなのかもしれません。教師や保護者からほめられることがうれしく、その期待にこたえようと頑張る子どもは素晴らしいですが、もしも何かでつまづいたとき、失敗をしたときに、気持ちを切り替えて次のことに向かって一歩を踏み出すことができるかが心配になります。

夢を持ち、その実現のために頑張ることができる子どもたちであってほしいです。

「大きな声、同じ注意に子どもは麻痺してしまう」

教師になりたての頃、その学校の校長が私たち若い教員に「声の大きさと給料は反比例する」と冗談まじりの話をしたことを何故か忘れることができません。教員は声の大きさにいつも気をつけなければならないというのは確かなことです。大きな声が出せるというのは教員にとって必要なことですが、いつも大きな声を出している必要はありません。子どもたちを引き付けるような話し方、声の大きさが大切です。学校でも教師の大きな声が、子どもたちの頭の上をただ単に通過しているような場面を見ることがあります。子どもたちはちゃんと分かっている、それが度重なりとすっきり慣れっこになってしまいます。「また何か言ってるみたいだな」程度の耳の傾け方しかしなくなります。

さて、ご家庭ではいかがでしょうか？子どもが「またか・・・」と思うような声かけや注意を毎日繰り返していませんか。毎日繰り返されると思われる言葉は、「宿題やりなさい」「お風呂に入りなさい」「テレビを観るのをやめなさい」「ゲームをやめなさい」「着替えなさい」「ごはんを食べなさい」「寝なさい」「起きなさい」などで、もしかしたらその言葉の前に「早く」や「いいかげんに」などの言葉が加わるのかもしれませんが。これだけのことを毎日、それも何度も言われる子は少ないと思いますが、この中のいくつかでも繰り返し毎日言われているとしたら、子どもは完全に麻痺状態になり、その注意を心から受け止めることなどなくなってしまうのではないのでしょうか。また、その言葉を投げかける保護者の方も、きっとそれだけで疲れてしまうのではないかと考えられます。

それぞれのご家庭で、いろいろと工夫した声かけがされているのだらうと思いますが、基本的な約束事があった上で、私たちは子どもたちが自分で考え、行動するのを「待つ」ことができるようになりたいです。

私はこの夏にびわの種を何個か土に埋めてみました。今その種は芽を出し、10cmほどの背丈になりました。子どもと植物が違うのは分かりますが、何も言わない植物の生長はじっと「待つ」ことができます。